

哲学とは～現象学的哲学史遡行～

パート2 <構造主義の閉鎖性を超えて>

- 0、はじめに
- 1、哲学とは
- 2、哲学はもはや不要か
- 3、ギリシャ悲劇～アリストテレス
- 4、プラトンの意義 ↓パート1
- 5、「主観—客観」論争 ↓パート2
- 6、フッサールの現象学へ
- 7、おわりに

5、フッサールの問題意識：「主観—客観」論争の克服

近代哲学・・・神学との決別（エポケー）と踏襲（真理概念）

⇒「真理（なるもの）」の探究＝「主観（人間の認識）—客観（真理）」の一致

●デカルト（1596～1650）「神の存在証明」・・・「方法的」懐疑

⇒「『神』がいなければ人間は『主観—客観』は一致しない（逆説的証明）」

△私は疑うがゆえに「不完全」であるが、「完全」という概念をもっている。
それは「完全」なる「神」が与えたものであるに違いない。

●カント（1724～1804）「世界二分論」（観念世界/経験世界）・・・批判哲学

⇒「客観（＝真理＝観念世界）は人間（主観）には認識不可」

●ヘーゲル（1770～1831）「絶対精神」・・・弁証法

⇒「人間はいずれ客観世界を認識できる」⇒絶対的絶対主義

●ニーチェ（1844～1900）「道徳批判」・・・ニヒリズム克服

⇒「客観などない。ただ解釈があるのみだ」・・・「力への意思」⇒**ポスト構造主義**

●マルクス（1818～1883）社会主義論・・・唯物論

⇒「外的環境が内面を規定する」⇒**構造主義**

竹田 1993 p.69 図

6、フッサールの現象学へ

フッサール>プラトン= (ヘーゲル+ニーチェ) ÷ 2

●フッサール (1859~1938)

◆現象学的還元とは？

「確信」の生じる条件に着眼

人は主観の外から主観のコードの正しさを確かめることはできない

⇒認識を主観からスタートする(しかない)

(「世界がなんであるか」は「生活世界」を営む上では必要ない)

<コギターツム/コギタチオ>

コギターツム：意識対象=超越物 ex. リンゴ

コギタチオ：意識作用=内在 ex. 視覚

↓もっと厳密に

認識の正統性の根源=直観(≡コギト) = 知覚直観+本質直観

・知覚直観：判断の基礎となる「原的な所与」【ものの知覚】⇔「志向性」(=意識)

・本質直観：「～とは何か」という判断【ものの意味】 ex. 「丸い」という概念

☆環境条件は偶然的であるが、出力行動は必然的である

⇒普遍性の現象学的還元

△手段としてのエポケー⇒純粹意識

「直観とは(略)純粹で注意深い精神の把握、しかも、理解するところについてなんの疑いも残さないほどに、容易で、判明な把握である。」(デカルト『方法序説』)

◆現象学とは？

普遍性の観取

1 「主観—客観」の一致は不可能であるという前提に立つ

Cf. 「いずれの主体も主観的現実だけが存在する世界に生きており、環世界自体が主観的現実にはかならないという結論になる。」(ユクスキュルほか 2005年) ex.魔術的なもの

2 「方法的」懐疑の立場をあえて取る(独我論) ←認識は独我論からしか出発できない

3 認識のなかに含まれる「真理の性格」、「イデア的なもの」、「普遍的なものに属しているもの」を看取 detect する

「個別的なものの中に普遍性を(略)直観的に把握し、そして表象作用を反復することによって概念的志向の同一性を確認する能力は、認識の可能性のための前提である。」(フッサール『論研』)

4 「正しい」認識ではなく、「妥当な」認識があるのみである

△相互的確信一致(真偽ではなく関係性を重視)

5 4が成立する一般条件とその構造について考えることができるだけだ

「学問的認識とは根拠からの認識である。何かの根拠を認識するということは、しかしかの事態であるということの必然性を洞察することである。」(フッサール『論研』)

- ・事物=それ自体では単独でありえない
- ・認識主体=他のものとの関係性のなかにある
- ・認識=ほかのものとの関係性のなかで可能となる

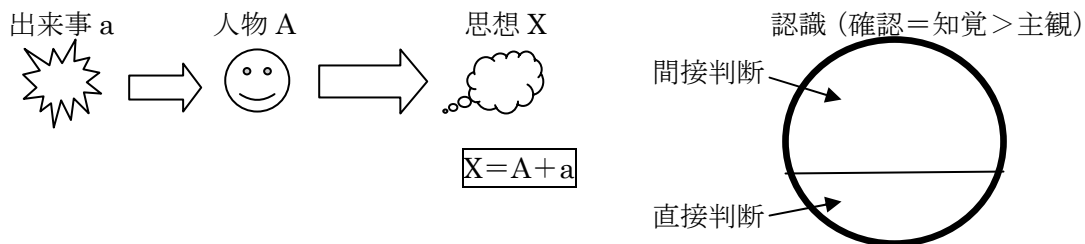
「関係が(略)関係に(略)関係する」(キルケゴール『死に至る病』)

<認識のルーティーン>

純粹意識⇒絶対的体験(ex.「表札」)→(意味付与)→経験的体験(ex.「これは私の家だ」)

△絶対的体験:疑う動機が起こらない事象

◆普遍性の現象学的還元



☆ある出来事により、ある思想が生まれる・・・各人が共通でもっているものが前提

例「講演会の講師選定」

α「人気のある講師を呼んで集客を増やすべきだ」

β「専門性の高い講師を招いて質を上げるべきだ」

⇒普遍性観取・・・「より良い講演会にしたい」

7、おわりに

●現象学批判1・・・「独我論に陥っている」

⇒あえて独我論的立場（「方法的」懐疑）からはじめているだけで、その批判は見当違い

●現象学批判2・・・「真理」を目指す、時代遅れな学問である

⇒上記のように、いかに「真理」などというものが存在しないのかを現したのが現象学であり、この批判も的外れである

<現代思想を超えて>

- ・現代思想：客観からの（科学的）視点・・・「認識の不可能性」＋「主体の不可能性」
- ・現象学：主観からの視点

Cf.近代科学の自己目的化・・・客観が主観を縛る ex.時間概念

▽現代思想はニヒリズムに陥るのみである

「真理」の破棄は必要だが、その先には「妥当」をこそ求めるべきである

(ソクラテスの転換)

◇私見1、なぜ現象学か

⇒構造主義の閉塞性（絶対的相対主義志向）打破の可能性の探究

◇私見2、現象学の現代的意義

⇒グローバル化する社会・・・共通理解の必要性

☆今こそフッサール（＝現象学＝プラトン）である

2009年4月17日(金)
同志社大学政治学研究会春学期勉強会

文責 法学部政治学科 2008年度生 早瀬義朗

<参考文献>

- 立松弘孝編『フッサール・セレクション』平凡社ライブラリー 2009年
フリードリッヒ・ニーチェ『世界の名著 ニーチェ』中央公論社 1966年
リー・スピックス『フリードリッヒ・ニーチェ』青土社 2006年
村井則夫『ニーチェ ツァラトウストラの謎』中公新書 2008年
竹田青嗣『ニーチェ入門』ちくま新書 1994年
ー 『自分を知るための哲学入門』ちくま学芸文庫 1993年
ー 『現象学入門』NHKブックス 1989年
ー 『プラトン入門』
ー 『現象学は<思考の原理>である』ちくま新書 2004年
ー /西研『はじめての哲学史』有斐閣アルマ 1998年
永井均『これがニーチェだ』講談社新書 1998年
岩崎武雄『哲学のすすめ』講談社現代新書 1966年
木田元『反哲学入門』新潮社 2007年
ー 『ハイデガーの思想』岩波新書 1993年
小熊勢記ほか『西洋倫理思想の形成 I』晃洋書房 1985年
中谷猛ほか『概説西洋政治思想史』ミネルヴァ書房 1994年
貫成人『図解雑学』ナツメ社 2008年
ユクスキュル/クリサート『生物から見た世界』岩波文庫 2005年
熊野純彦『西洋哲学史 近代から現代へ』岩波新書 2006年

【Memo】

・・・参考までに

哲学とは現代までさまざまな紆余曲折を描いてきた。すべての学問の始まりは哲学(的欲求)からである。哲学から神学が登場した(アリストテレスの「最高善」=「神」とする思想)、イギリスからは経験論という科学的思想の元が登場している(観念でなく、実際に経験可能であるものから考察をするという基本姿勢に立っている)。さまざまな方法の哲学があるが、その中でも最難関といわれているのがドイツ哲学である。人間の知性の本性に忠実に、「事物をひたすらに疑う」ということを徹底的に追及するのがドイツ哲学である。いわば、ドイツ哲学は哲学の「奥の院」ということになる。「存在するとはそもそもどうということなのか」、「客観的世界の把握は人間には可能なのか」など、人間の問題の最難関をあぐなき精神で考え続ける。それは時に「机上の空論」であり、無用な学問であるという批判を受ける。しかし、この批判はナンセンスである。人間は生きていく上で様々な困難に阻まれ、絶望し、「生」の意味を問うこともあろう。その時、最後の砦としてその究極問題に答えてくれるものが(ドイツ)哲学なのである。人が生きているうては必ず哲学というものが必要とされる。これは人類普遍の法則であろう。人が地球上にいる限り、哲学はなくなる。参考までに日本に哲学がなかったということについてとこと言っておくと、日本にもそういった思想はあった。しかし、日本の場合は「道徳思想」というものであって、根本を疑い続ける「哲学」は生まれなかった。これは日本と西洋との地理的な差異にすぎないものである。西洋はるか昔から隣国(「国」の概念はウエストファリア条約からだがここでは便宜上「国」と表現する)との激しい衝突が頻発していた。その中で、「いかにすれば共同体を起え出たものとの妥協が可能か」ということが長年考えられ続けてきたのである。東アジアには「中華思想」という中国をトップとするヒエラキーが昔から存在しており、西洋ほどの衝突はなく、さきの問題解決へのイニシアティブが起こらなかつたのである。(東アジアには道徳思想が適していた。そのため、根本を疑う[=「なぜ道徳に従わなければならないのか」という問いを發する]風習は根づかなかつたのである。)長々としてしまったが、つまり、日本にもむかしから西洋とは形は違えど「哲学」なるものは存在していたのである。(そしてこれからもなくなりはないだろう。)

私が言いたいことはふたつである。ひとつは哲学は様々なものが存在しており、一概に「哲学」とは言えないのであり、その中でもドイツ哲学は普遍的に人間を虜にする魅力を有しているということである。(「哲学はダメ」などと簡単に決めつける人は「バカ」としか形容できない。)もうひとつはドイツ哲学の魅力である。人間の素朴だが、最重要な問題への解決の糸口、それがドイツ哲学なのである。これがなくなってしまうと、世界は「バカ」だらけになってしまうであろう。(「ドイツ哲学をやらないやつ」が「バカ」なのではなく、仮に世界から「ドイツ哲学」というものがなくなったら世界全体がただの機械人形の織りなすなんともつまらない世界になるだろうということが言いたいだけだ。私はロマンこそが人間的な魅力であると信じていたから・・・。)

この勉強会で哲学に関心を抱き、それによってあなたの人生に変革を招き入れられたならば、プレゼンターとしては役割を果たせたといえる。

2009年4月17日15:55 田辺図書館1Fのパソコンにて 政治学研究会幹事 早瀬義朗